

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



東京都北区の滝野川小学校で毎週金曜日の朝に行われている「NIEタイム(新聞タイム)」。児童たちは興味を持った新聞記事を切り抜き、専用のスクラップブックに貼り付け、感想などを書き込む(記事6面)

巻頭特集

あなたが大学に求めるものは？

都立西高で「大学の実力バイキング」 2・3

札幌でヤマザキマリさん講演会 4・5

東京・滝野川小でNIEタイム(新聞タイム) 6

知能ロボットで高校生が理科・算数の“授業” 8

日本近代文学館セミナー 5 読売新聞の出前授業 7 2017年度大学入試出典調査 9

リレーエッセー 米 イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校「難問解決の中で発見する自分の方法」10

2017.7

Vol.31



あなたが 大学に 求めるものは?

大学の實力バイキング @都立西高

6月17日、東京・杉並の都立西高校の一室で、近くの私立校成学園高も合わせた生徒、保護者、先生ら計約60人がトレーを抱え、歩き回っていた。それぞれトレーに「主食」「主菜」を二つずつ、「副菜」「汁物」、デザート「果物」を一つずつ載せる。バイキングを思わせる動きだが、対象は料理ではない。名付けて「大学の實力バイキング」。卓上に用意されたのは、退学率や留年率など「大学の實力」調査の主要項目を書いたカードだ。調査項目にはないが、進路指導で重視される入試難易度(偏差値)やブランドなどもカードにした。興味を引く項目

がなければ、自由作成も可。進路選択には多様な物差しがあることを知り、自分で調べて考える――狙いをそこに絞った。2008年に始めた「大学の實力」の年次調査も10回目。受験生に活用してほしい。キャリア教育に取り組み塩瀬隆之・京都大学准教授に調査データを活用したワークショップを提案してもらった。

顔出す「変化の芽」
「まずは合格」と偏差値を選ぶ保護者や先生もいる。生徒のトップは「学費」。その一人、西高2年の尾上美月さん(16)の夢は小学校の教員。「学費」と「正規雇用率」を軸に教育内容を調べたいという。「偏差値は全く気にならない」「アクティブラーニング」を追加した校成高1年(15)は「4年で成長できる大学を選びたい」。

高校・大学教育、その間をつなぐ大学入試を一体的に見直す「高大接続改革」の推進役、安西祐一郎・日本学術振興会理事長は「世界の変化を、子どもたちは察知しているのではない。旧来の価値観をうのみせず、主体的に人生を考える世代が育ち始めている」とみる。変化の芽はすでに顔を出しているようだ。



大学の實力バイキングを提案した塩瀬隆之・京都大学准教授



「ものさし」を選ぶ生徒たち

保護者も生徒も真剣そのもの



読売新聞社の第10回「大学の實力」調査の結果がまとまった。退学・留年・卒業率からは男女間の格差が際立ち、女子が順調に進級し、卒業する現実が浮き彫りとなった。今春の4年制学部卒業生の正規雇用率でも、男子が55%に対し、女子は71%と16ポイントも上回っていた。

退学・留年、正規雇用率……際立つ男女間格差

逆に進学率は男子が8ポイント上

回っていた。調査対象751大学の92%。608大学の回答を得た。

世界的変化が加速している。そこでどう生きるかを考える17歳の選択が、半世紀も前に作られた偏差値頼りでいいのか。

「大学の實力」調査は、その思いか

ら始まった。退学率や卒業率など、100年以上も門外不出だったデータの一覧表は、大学の反発を招いた。しかし、大学を理解するには必須との認識も広がり、情報公開が進んだ。受験での偏差値利用は、1960年代に広まった。当時の入試の主流は

それでも重視される理由を、進路指導に詳しい

発筆記試験。浪人生が急増したこと

も相まって、全国模試での受験生の「位置」が一目で分かる「浪人防止」の小道具として重宝がられた。時が過ぎ、大学は様変わりした。規制緩和で大学・学部設置がしやすく

なり、少子化で受験生の獲得競争が

激化した。学部名称は91年の91種類から、いまや約700種類、7倍以上に増えた。入試も多様化し、面接や書類で選ぶAO入試など、筆記試験なしの入学者が私立で半数を超え、その傾向は国立にも広がる。偏差値では測れない入試が増えているのだ。

それでも重視される理由を、進路指導に詳しい

東京大学の中村高康教授「教育社会学」は「不安解消の装置だから」と説明する。効率良く入試を突破するための戦略に組み込まれているのだ。「やり直しの難しい日本の教育システムが背景にある」とも指摘する。

大学の實力2018

9月下旬 出版

「大学の實力」調査をまとめた書籍「大学の實力2018」が9月下旬、中央公論新社から出版される。

データは各大学の学部ごとに分けて掲載する。「自ら学ぶ習慣」についての学部長の回答や、教員免許取得者数なども収録する。「大学の實力バイキング」の進め方も詳報する。

書籍の収益はこれまで、東日本大震災で被災し、進学を目指す高校生を対象に創設した「読売光と愛・復興支援大学等奨学金」(読売新聞後援)に寄付してきた。今回も奨学金に充てる。

書籍の問い合わせは中央公論新社へ。☎03-5299-1730

検討委員 (50音順、敬称略)

天野郁夫・東京大学名誉教授 / 小方直幸・東京大学教授 / 小田隆治・山形大学教授 / 綿川正吉・国際基督教大学元学長 / 清成忠男・法政大学元総長 / 座長 / 沢田進・大学基準協会元参与 / 千葉吉裕・日本進路指導協会理事 / 浜中義隆・国立教育政策研究所総括研究官 / 福島一政・追手門学院大学副学長 / 横田利久・大学行政管理学会元会長

高校生視野に 企画展やセミナー

日本近代文学館

日本近代文学館（東京・駒場）がこの夏、教室と文学をつなぐ活動に力を入れている。「教科書」をテーマにした企画展や、初めての教員対象のセミナーなど、「高校生」を視野に入れた取り組みを打ち出した。閲覧室を利用できるのはこれまで18歳以上だったが、6月から15歳以上に引き下げた。開催中の企画展は「教科書のなかの文学／教室のそとの文学……芥川龍之介「羅生門」とその時代」（9月16日まで）。芥川の短編「羅生門」

について、案を練った構想ノートや、発表後に書き換えた結末の比較、典拠である「今昔物語」、小説から生まれた映画や演劇など、学習を立体的にする資料が目白押しだ。7月1日のセミナーには、高校の教員など27人が参加した。ふだんは非公開の所蔵庫をめぐるバックヤードツアー、企画展の見学に、教科書編集に携わる安藤宏東大教授と中島国彦早大名誉教授のレクチャーが続いた。安藤教授は「『羅生門』は文学研究の面白さを知る第一歩

になる。小説がどう生まれ、どう育つかを知ると関心が高まる」。中島教授は「ことばを通して世界を新しく見られるのが文学。それを支えるのは現場の教員」などと話した。参加者から質問が相次ぎ、予定を1時間も超す熱気だった。



セミナーのようす

講演でヤマザキさんは、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の普及に伴い、本を読んだり、自分の考えを自分の言葉で表現したりする機会が減ったと指摘。「書籍には作り手の思いが入っていて、それと向き合う中で、自分の考え方が明らかにになっていく」と強調した。イタリア留学時に安部公房や開高健などの作品に没頭していた自身のエピソードも披露した。



大勢の来場者が集まった講演会

主催：読売新聞北海道支社
活字文化推進会議（事務局・読売新聞東京本社内）
共催：札幌テレビ放送
協賛：コーチャンフォーグループ
後援：札幌市教育委員会



ヤマザキさん

囲に想像力など感覚的なものが必要」と説いた。漫画家になった転機については、27歳でシングルマザーとして長男を出産し、「生計のため漫画家にならうと決めた」と話した。その上で「漫画の勉強で偶然、タブーを描くつげ義春さんの漫画を読んだ。「漫画を通して文学ができる」と感銘を受けた」と、目指す作風の原点を説明した。

同市中央区の主婦（65）は「本っていいなと改めて思った。世界が広がり、日常も彩る。ヤマザキさんが挙げた本を探しに、これから書店に行きます」と声を弾ませた。同区の会社員（41）は「若いうちに海外に出たり本を読んだりして自分の世界を広げていく大切さを実感した。海外旅行に行きたくなりました」と笑顔をみせた。ヤマザキさんのサイン会の列に並んだ同市西区の高校2年生（16）は「ヤマザキさんの漫画は学校の図書室にも置いてあり人気。今日の内容を学校でも紹介したい」と話した。

古代ローマ人が現代日本にタイムスリップする「テルマエ・ロマエ」で知られる漫画家のヤマザキマリさんの講演会「本で作られる無敵のエネルギー」（読売新聞北海道支社、活字文化推進会議主催）が6月17日、札幌市のSTVホールで開かれ、約360人が耳を傾けた。読売新聞社が取り組む活字文化推進イベントの一環。ヤマザキさんは1997年に漫画家デビュー。テルマエ・ロマエは第3回マンガ大賞などを受賞した。現在はイタリア在住だが、母親が札幌交響楽団の団員だったことから幼少期は千歳市で過ごし、一時帰国の際も道内に滞在するなど、北海道とゆかりは深い。

ヤマザキマリさん、札幌で講演

書籍の作り手の 思いに向き合い、 自分の考え明らかに



活字文化について講演するヤマザキマリさん（17日、札幌市中央区で）

講演会では、鶴飼哲夫・読売新聞東京本社文化部編集委員との対談も行われた。ヤマザキさんが愛読してきた作家の横顔や出産経験、海外生活などの話題で盛り上がり、会場からは人気作「テルマエ・ロマエ」について質問が相次いだ。

「想像力は本で養った」

鶴飼哲夫・編集委員と対談



鶴飼編集委員

●文章から絵が浮かんでくる

独創的な作風に根強いファンが多いヤマザキさんは、「想像力は本で養った」と話し、幼少期に読んだ「アラビアンナイト」などを紹介。シンドバッドや空飛ぶじゅうたんなどの登場に「絵描きになりたいという思いや、海外への憧れに火がついた」と振り返った。その後、影響を受けた作家として安部公房や開高健などを挙げ、「文章から絵が浮かんでくる」と、漫画家ならではの視点で語った。

●常識崩す人がヒーローに

鶴飼編集委員から、ヤマザキさんの作品に常識にとらわれない主人公が多いことについて質問が飛ぶと、「物事にとらわれない人は興味深い」とヤマザキさん。自身の作品に取り上げたことのある米アップル社の共同創業者、スティーブ・ジョブズ氏を例に「常識を崩していく人がヒーローになりうる。その人を多面的に捉えるためには、周囲に想像力など感覚的なものが必要」と説いた。

●「テルマエ・ロマエ」に質問集中

会場からの質問は、映画化された人気作「テルマエ・ロマエ」の構想に集中。タイムスリップのアイデアについて、「シリアで古代ローマの遺跡を住まいにする遊牧民に出会った時に、時間感覚の違いに気づいたことがきっかけになった」と語り、会場を沸かせた。

◎来場者の声

人気漫画の作者とあって、講演会では若者の姿も見られた。札幌市西区の会社員（27）は「幼い頃の夢は漫画家だったので、興味深かった。本や旅を通して、知識や見聞を広めることが『名作』の鍵なんだと思った」と話した。



あっという間に選んだ記事の感想まで書き上げていく児童たち。その日の成果を橋本教諭(写真左の左)に見せる瞬間が楽しそうだった

新聞タイム

日本新聞協会の関口修司・NIEコーディネーターが、東京都北区の小学校長時代に提唱・導入した、子どもたちが新聞に親しむ活動。子どもが主体の継続的な活動で、全校児童が一斉に取り組んだ。「新聞タイム」や「新聞の時間」など、学校によって呼び方は異なるが、全国へ広がりを見せている。日本新聞協会では「NIEタイム」と呼んでいる。

広がる

新聞タイム

東京・滝野川小をルポ

朝学習などの隙間時間を活用し、週に1、2回、新聞に親しむ活動「新聞タイム」を取り入れる学校が全国に広がっている。継続的に取り組むことで、子どもたちの学力が向上したとの報告もある。2014年度から本格導入した東京・北区の小学校の実践をルポする。

スクラップレマ

要約・感想も

7月上旬、北区立滝野川小学校で行われた6年1組のNIEタイム(新聞タイム)。エアコンの利き始めた朝の教室に響く

のは、児童たちが黙々と新聞を繰る音だった。

「もう僕は決めたよ」。そう言って男子が、はさみで記事を切り始めた。のりでスクラップ帳に貼りつけ、要約と感想を書き込む。スクラップ帳の代わり

に、ワークシートを使う場合もある。

担任の橋本幸恵教諭は、ほとんど指示を出さない。子どもが自主的に取り組む時間だからだ。

記事読んで読解力も

開始から10分。スクラップを提出する児童の列ができた。橋本教諭は赤ペンで丸をつけ、「やったね!」のスタンプを押す。「終わっていない人は20分休みなどを使って完成させ、提出し

て」。こうして週に1度、15分間のNIEタイム(新聞タイム)は終了した。

「新聞を読むことが生活の一部になった」と、九州豪雨に注目した中村彩乃さん。ヒアリを選んだ佐藤文功君は「道徳の授業で相手の気持ちが分かるようになった」と手応えを語った。

「社会問題や地域のニュースに目が向くようになった。読解力もついてきた」。橋本教諭はそう言って目を細めた。

「新聞に興味があった」



新聞各紙の違いなどについて説明する高橋支局長

茨城県日立市の市立立塙山小学校（佐藤恵子校長）で6月28日、読売新聞日立支局の高橋健太郎支局長が、5年生の2学級それぞれで、新聞についての「出前授業」を行った。

新聞記者の話を聞きたいという立支局長が講師を担当して、今年で5年目となった。

高橋支局長は、パソコン、デジカメ、スマホ、ICレコーダー、腕章などの取材の七つ道具を披

露。取材の仕方に始まり、読売新聞茨城県版の編集や印刷、配達という新聞社の仕事の流れを説明。当日の読売新聞を広げて、「見出し」「前文」「本文」の役割や主なページの内容も紹介した。

読売新聞が大きなニュースをどう報道するかという例を示すため、2011年3月11日の東日本大震災発生を報じる朝刊の1面を見せると、「東日本 巨大地震」という横長の見出しに、児童から「見出しが大きい！」との声が上がった。

また、新聞の読み比べでは、将棋の藤井聡太四段の新記録「29連勝」の記事が載った6月27日付朝刊の全国紙・地方紙計7紙の1面を黒板に貼り出した。この記事を各紙が「1面トップ」「1面準トップ」「それ以外」のどの扱いで掲載したかを比較し、新聞社によってニュースの扱いに違いがあることを説明した。

授業に参加した児童たち一人ひとりから、後日、日立支局にお礼の感想文が届いた。「新聞の読み方が分かり、読んでみよう」と興味がありました。「新聞社の仕事がよく分かりました」などと書かれていて、出前授業が新聞に関心を持つきっかけになったことをうかがわせた。

茨城・日立市立塙山小

災害取材の必要性実感



「災害現場の声を確実に記録に残す必要がある」と話す堀家記者

夏休み中の特別授業を企画した福岡市の私立筑紫女学園中学校（小柳和孝校長）の依頼を受け、読売新聞西部本社「新聞のちから」委員会は7月24日、読売中高生新聞を題材に使った出前授業を行った。

講師は生活文化部の堀家路代記者。教室の生徒35人と同じ中学1年生の子を持つ母親であることを自己紹介で明かすと、生徒たちの目が輝いた。

堀家記者は、かつて雲仙・普賢岳の大火砕流被災地で取材した際

福岡・筑紫女学園中

に、犠牲者の遺族から「無神経だ」と厳しく叱られたエピソードを披露。「それでも『今の思いを世の中の人たちに忘れてほしくない』と取材に応じてくれる人たちもいる。そうした現場の声を確実に記録に残す必要がある」と話した。

7月上旬の九州北部豪雨で、福岡県内でも大きな被害が出たこともあり、生徒たちも災害報道の必要性を実感した様子だった。

読売中高生新聞を使った授業の題材は、静岡県内の自治体が教師の負担軽減のため夏休みを10日間程度に削ることを検討している、という記事。主見出し部分を隠したコピーを生徒に配り、「記事をじっくり読んで、自分たちで見出しをつけてみよう」と促した。班にわかれた生徒たちは討議しながらキーワードを探し、それぞれに見出しを考案。「夏休み短縮 子どもたちに影響」などと大人の視点とは違った見出しをつける生徒もいて、着想のセンスに堀家記者も驚いていた。

生徒たちの発表を受けて、新聞の見出しの大切な役割を堀家記者が説明。「まず見出しをサッと拾ってその日のニュースを大まかにつかみ、その後、気になる記事に目を通してほしい」と新聞の読み方をアドバイスした。

千葉・市川高校2年生が小学生に理科・算数の“授業”

助手は智能ロボット！

慶大理工学部チームが支援

千葉県市川市の私立市川高等学校の高校2年生5人が7月8日、智能ロボットをアシスタントにして、小学生たちに算数クイズや理科実験の特別授業を行った。2グループに分かれた5人は、慶應義塾大理工学部のプロジェクト・チームからサポートを受け、智能プログラムを自動生成するアプリを使用した。



ロボットのSOTAが小学生の誕生日を言い当てると、教師役の生徒たちも手をたたいて喜んだ(7月8日、市川高校)

ロボットと掛け合い

「生まれた月を4倍してね」
「9を足して」
「それを25倍」

「生まれた日にちを足してね」
「生まれの日を4倍してね」
「9を足して」
「それを25倍」
「生まれの日を4倍してね」
「9を足して」
「それを25倍」
「生まれの日を4倍してね」
「9を足して」
「それを25倍」

これは、地域の小学生を対象に同校が行う「高校生が教える理科・算数体験講座」のひとつ。同校2年の小田みづきさん(17)と山口琴音さん(16)、そしてSOTAが掛け合いを通じて、「誕生日当てクイズ」の授業を進めていく。

4種類の計算から出た数字をSOTAに伝え、SOTAが誕生日を言い当てるといふシナリオ。計算が終わった子どもが4桁の数字を伝えたところ、SOTAの答えは「あなたの誕生日



特別授業の前日、専用アプリでSOTAの話す言葉や動作入力に追われる小田さん(手前)と山口さん

は8月75日。間違っていると思うよ。」

計算違いをロボットに指摘されるたびに大爆笑となり、SOTAが誕生日を正しく言い当てると拍手が沸き起こる。「すごい」「何で分かるの?」という声飛び交い、生徒たちは教える喜びをかみしめた。

直前によく準備完了

ロボット授業をサポートしたのは、最先端の智能プログラムを研究する山口高平・慶應大理工学部教授と同大研究グループの高橋正樹准教授、萬礼忠特任助教だ。

山口教授と同校は昨春秋、読売教育ネットワーク事務局が企画した高校生向けグループワークをきっかけに連携をスタート。教授らが人工知能(AI)プログラムを自動生成するアプリ「PRINTERS」を研究開発中だと知り、生徒たちがアプリを活用することになった。

通常、ロボットが発する言葉や動作のプログラミングはITの専門家にしか行えない。だが、研究グループが開発したアプリで発声内容や動作を入力すると、PRINTERSが智能プログラムを自動生成する。

今回、生徒5人がパソコンを使い、クイズや実験授業のワー

クフロー(シナリオ)作りに着手したのは6月下旬。本格的なプログラミングが必要な計算は慶大側が担当した。
生徒たちが作ったワークフロー通りにSOTAは話したり動いたりするのか? 実際にSOTAを使って最終確認できたのは授業の直前、ギリギリのタイミングだった。

その場で制御、改良も

「準備段階から慶應の先生たちにおんぶにだっこ。授業でもSOTAの話すスピードが速すぎて、聞き取れない子どもたちがいた」

山口さんは唇をかみしめたが、授業を見守った高橋准教授の見方は違った。

「ワークフローが不完全なこととは分かっていたが、失敗しながら挑戦するのが大切。SOTAの話し方に問題があると分かると、すぐにフローを改良した生徒たちの対応力には驚きました。プログラミング経験ゼロだが、システムを理解できている証拠です」と評価した。

「誕生日を言い当てられた小学生が驚く瞬間の達成感は格別。うれしかった」と振り返る5人。研究グループと連携を進め、来年3月の小学生講座でもロボット連携授業を発表する。

読売新聞、ジャパン・ニュースの記事

2017年度大学入試で、読売新聞とジャパン・ニュースの記事が141校とセンター試験(計226件)で取り上げられた。読売新聞と学研プラスが調査した(2017年7月7日現在)。読売新聞とジャパン・ニュースの記事から出題したのは北海道大学や電気通信大学、横浜市立大学、大阪市立大学などの国立大のほか、立教大学、日本大学、同志社大学、立命館大学、関西大学などの私立大。

141 大学
で出題され
ました

「大学受験は

新聞から!」発行



2017年度大学入試の出題調査結果と分析をまとめた冊子「大学受験は新聞から!」を発行した。

冊子では、小論文・面接対策にもつながる授業での新聞活用法「新聞でQuestion」を紹介している。これは、新聞を読んで質問を考え、その答えを自ら探すグループワーク。この活動を繰り返すことで、メディアリテラシーやポイントを捉える力やコミュニケーション能力、自分で考える力が身につくといわれている。



冊子は、東日本の高校を中心に全国の高校に配布しています。希望者は、①～③を同封の上お申し込み下さい。
①郵便番号、住所、氏名を書いた紙片(あて先として封筒に貼ります)
②冊数(1人3冊まで)、電話番号を書いた紙
③送料分の切手(1冊220円分、2～3冊は290円分)
送付先: 〒100-8055(住所不要)
読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局「大学受験は新聞から」係

英語の課題文も

科目別では、小論文が103件、次いで英語が77件、国語が20件、その他26件だった。小論文では、医・歯・薬・看護・保健系学部を中心に10大学で英語の課題文が出題されていた。

記事種別では、日々のニュースを扱った一般記事45件、次いで連載やコラムが33件、社説が29件だった。取り上げられた一般記事のテーマは、

リオデジャネイロ五輪や東京五輪、18歳選挙権、イクメンや育児休暇など子育て関連など、社会の関心が高い話題が多い。受験生の社会事象に対する関心や意見を述べる小論文で特に取り上げられることが多かった。

学部別に見ると、医・歯・薬・看護・保健系、人文・国際系、法・経済・社会福祉系、工・理・情報系の4系統学部では、小論文で取り上げられることが多かった。一方、家政・芸術・生活・体育系学部では、英語での引用が半数を超えていた。

教育学部では子どもの貧困やいじめ

取り上げられた記事も、学部の系統に近いテーマの記事が目立った。教育学部では、子どもの貧困やいじめといった話題が多かった。法・経済・社会福祉系学部では、少年法や夫婦別姓など法律や政治に関するもの、五輪や過労自殺など世間で注目を集めた事柄の記事が目立った。医・歯・薬・看護・保健系学部は、受動喫煙や在宅医療といった医療や福祉に関するものが中心に選ばれていた。

出題大学一覧を公開しています <http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/nyushi.php>



インターンシップ先の会社で仲間に囲まれる林さん(中央)＝本人提供

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロウシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロウシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

海外で学ぶ・リレーエッセー ③1 米イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 「難問解決の中で発見する自分の方法」

エマ・ウィラード・スタール(米ニューヨーク州 卒、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校2年(執筆時))

林 瞳 さん



RYUGAKU FELLOWSHIP



イリノイ大学
アーバナ・シャンペーン校

1867年設立で今年創立150周年を迎えたイリノイ州の州立大学。アーバナ・シャンペーン校はその中でも中心的な存在。世界100か国出身の留学生が学び、ノーベル賞受賞者11人を輩出している。

ここにやってくるから3つの学期を経て、目指していた人物像に近付きつつある。ここへの進学を決めたのは、ちょっとば

かり忍び足で外に出て、より大きな世界を見たかったからだ。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の学生総数は

4万4千人に及び、5千のクラスがある。私が1年生のときにいた統計学のクラスには800人もいた。

米国にあるこの巨大な大学の日常世界の中で、私は目立たない存在だ。私が履修する5つの講座のうち3つの講座の教授は私の名前すら覚えていない。

だが、これこそがまさに私がここに来た理由なのだ。すなわち、私は居心地の悪さ、という生活に身を置きたかった。そうすれば存在を認識してもらうために自分の殻を破らなければいけない。そうするためには、宿題を期限通りに仕上げる事ができるように、誘惑と戦うばかりでなく、自分のいる心地よい空間からそっと抜け出さなければならぬのだ。

級友や知らない人と有意義な話をするのが、私は好きだ。食事しながら、自分が気にかかっていることについて、人の意見、信念、見方を学ぶことができる。今とても関心があるのは、産業・組織心理や、会社の発展についてだ。3時間の授業での話し合いは、時に夕食時間にずれ

込むことがあり、ピザを食べながら、自分の意見を聞いてもらい、他人の意見を聞く。中には28歳の修士の大学院生、心理学の教授、ザンビア出身の留学生、農場育ちの学生がいる。最初は紳士的に始まる会話は、やがて激しくなる。好きなこと、嫌っていること、気になっていること、やらないことを吐露しなければならぬ。こんなすばらしい機会は、他のどこで得られると言うのだろうか？

それぞれの学期で、教室での学習は要求水準、責任、誘惑がより高くなっていく。自室に閉じこもりたくなるときもあるが、これが自分の欲していた生活だ、と思いつきさなければいけない。自分ひとりですらなければいけない環境の中で戦い、成長すること。これこそが、私が強くなり、特別な存在になる方法なのだ。(会報編集部抄訳 The Japan News 2017年1月1日)